

ベルギーで見たもの

名古屋大学国際交流協力推進本部 特任講師

山口 博史

フランスに留学していたのはすでに 14 年前のことになった。ベルギーで盛んに調査をしていたのも 9 年前のことになった。そして、いまでもことあるごとにいろいろな筋から聞かれるのは「あなたはヨーロッパの研究をやめてしまったのか」ということだ。

丹邊先生をはじめとする社会学講座スタッフのご指導と研究室メンバーの皆さんからいただいたご意見に鍛えられ、2011 年 2 月に博士号を取得することができた。その博論についてふりかえるにあたり、それ以前の、ヨーロッパの研究（ベルギーの言語紛争についての研究）をしていたころのこととのつながりについて少しふれてみたいと思う。

昔、ベルギーという日本ではあまり知られていない地域を研究対象に選んだのは、かつて日本で受けたフランス、フランス語とその「普遍性」への過剰な意味づけに基づいた教育に違和感をもったことに始まる。ブルデューが「普遍のショーヴィニズム *« un chauvinisme de l'universel »*」(Bourdieu, 1999: 12) と呼んだもののかげらをそこに嗅ぎ取っていたのかもしれない。そのような世界観を相対化する方法についての思いが長く消えなかった。フランス語に対する両義的な感情だったといってもよいだろう。そして、若い私はオランダ語とフランス語、ドイツ語の話者がいるベルギーのあり方に興味をおぼえていた。

最初と二つ目の卒業論文にはベルギーのオランダ語側の社会運動であるフランデレン運動 (Vlaamse Beweging) の研究を選んだ。20 世紀半ばまでのベルギーの歴史では、フランス語の特権的な地位に対してオランダ語の地位を向上させようと奮闘したこの運動の動向が一定の部分をおさめている。運動は大きな成功をおさめ、ベルギーではついに言語別の連邦化がなされるにいたった。フランス語の特権的な地位を解体してきた同国の歴史に、当時の私は何かしら自分の思いと通じるものをみたのだろう。

誤解をおそれず図式的に述べれば、現在のベルギーは北半分がオランダ語圏、南半分がフランス語圏で、オランダ語圏の中に島のように仏蘭語併用のブリュッセル首都地域圏が浮かんでいるようなところである。これは先に述べたオランダ語話者たちの言語運動、フランデレン運動の制度化の結果である。ただ、近年ではこの運動が勢い余ってオランダ語圏内のフランス語話者を抑圧する事態を一部で生んでいる。現代ベルギーについての調査を進めると、その状況がみえてきた。私も自問が続いた。ある一定の社会的カテゴリー（言語話者などはそのひとつの例であろうが）への行きすぎたコミットメントは、それがどの側へのものであっても、不必要な敵意を呼び起こすことに、場合によっては何らかの形で加担してしまう、と。もちろん言わずもがなのことだが、これを心からしみじみと感じることは、よくある通り一遍の言説とは違うことだった。

そのため修士論文では一転し、オランダ語圏に居住しオランダ語圏からの圧力にさらされるフランス語話者の運動、また両言語圏の境界地域に居住する蘭仏語話者たちの地域活動を取りあげることにした。ただここでも葛藤があった。蘭仏語圏の境界地域にフィールドワークに入ってみると、オランダ語話者、フランス語話者という社会的カテゴリーとそれにまつわるおおまかな行動パターンの違いがあり、社会空間が言語集団別にゆるやかに

区分されてはいた。しかし、そこに住んでいる個々人をみれば、蘭仏言語話者という社会的アイデンティティはときに曖昧になっていたのだった。そして多言語地域には、複数の社会・言語空間を、日常的なかたちで渡り歩く人がいて、それが別様の刺激になった。

おそらく日本で社会化された私は、言語話者という社会的カテゴリーに、実感のレベルで強くとらえられすぎていたのだろう。そしてある言語話者に関わる政策的抑圧とそれに抗う活動について突き詰めるだけでは、敵意の応酬という局面以外の何かについての知見につなげるのは難しいのでは、ということが頭をよぎった。ベルギーについて、いくつかの角度から研究した後に細かな知見以外のところで気付いたのはその点だった。もちろん常に両義的な感情を抱えながらだったとはいえ。その考えが生じたところで、それまで持っていたベルギーに関わる問いを作り出す原動力が鈍った。次の方向性を見失いかけたといってもよい。

その頃には周囲からの推奨（日本の社会のことも研究すべきだということ）があった。そして上のように何よりも自分の事情（ベルギー社会に対する問いをつむぎ出す内的原動力の一時的衰え）があった。ベルギーに関して博士論文を書くだけの研究をするには、調査費用の問題などから学振特別研究員などの外部の資金を得ることがどうしても必要と思われた。しかし、「抑圧への抗い」を中心とした問題意識が宙に浮いていたその時点では、ベルギーについて自分が興味深いと思える問いを出す原動力を持ちえなかった。件の研究の意味を他の人に説得できないその頃の状況では、先の見込みをつけられず、ベルギーの研究に「賭け」られなかった。

とはいえ、次のテーマとして選んだ日系人に関する研究も、特に最初は七転八倒しつつ進めざるをえなかった。D2のときに書いた論文を、幸運なことに学会誌に掲載してもらえたため、周囲からは博士課程の最初の段階で苦しんでいたとはみられていなかったようだけれども。修論と博論とでテーマを大きく変える（それに加えて私の場合はエスニシティ研究から市民社会論への拡大的移行）ことは、研究の途中で主要な論点に関して最初から勉強しなおしになることだから、労苦をとまなうものだった。事実、修士論文と博士論文の参考文献リストをあらためて見返してみると、重要なポイントで参考とした文献の重なりは5%にも満たない。右手と左手が別々に動いているような状況だった。それを統合する私の中で、ベルギー研究へのノスタルジーがつのったのは偽らざるところだった。

この時期に、いろいろな筋から「あなたはヨーロッパの研究をやめてしまったのか」という質問を投げかけられるのはとてもつらかった。いつか再び取り組んでみたいと思っただけでも、いつになるかはまったくわからなかったからである。またそのための原動力を当座失っている自分を強く責められるように感じたからである。

ベルギー研究へのノスタルジーは実際には直接に実を結ぶことはなかった。しかし抽象的なところで、かつてベルギーでみたことと博士論文で扱った問題関心が通底していることに気付いた。先に述べたように、ベルギーでの最後のフィールドワークで私が特に興味をひかれたのは、言語共同体を横断して活動をする人たちのことだった。それを意味ある形で思い出したとき、そうしたエスニシティの境界を乗り越える人々、さらに広く言えば、多くの場に顔を出し、結果としてさまざまな境界を乗り越えていく人たちはどんな人たちののか、またその動きを可能にしている社会的背景は何なのかということに、私は興味を持ち続けてきたことに思い至ったのだった。気がつけば、日系南米人の支援活動に関する

問いとベルギーの研究をしていたとき最後にたどり着いたコアな問い（実際にはそれ以前の問題意識に属することだったが）との関連について考えていた。もちろん、私の発想にはその種の癖があり、それが形を変えて何度も呼び起こされているだけだ、という見方もできるのだが（あるいは、こちらのほうが正しいのかもしれないけれども）。

ポルトガル語には「サウダージ (Saudade)」という言葉がある。ノスタルジーと似た意味の言葉だが、ノスタルジーが後悔を含んだ後向きのニュアンスを帯びているのに対し、サウダージはより前向きの想念も帯びた言葉であるという。自分のかつての関心と現下の関心のつながりを意識できてから、ベルギーで見たものについてのノスタルジーはそのサウダージにゆるやかに変化していった。かつての、フランス語への両義的な感情も、時の経過がそうさせた面は多分にあるにせよ、極端なものではなくなっていく。それは、博論の準備を通じ、境界を越え様々な場に顔を出す人たちやその活動にふれて、何らかの社会的カテゴリーへの過剰なこだわりの「風化」が一部進んだことにもよっていただろう。

だから現在では「ヨーロッパの研究をやめてしまったのか」という質問（いまだによく聞かれる）には、いまに機会を得たら再開できるし、関係する問題意識で目下のテーマに取り組んでいる、と答えることができるようになった。納得してもらえないことは多いが、今の私がおかれた状況を非当事者の立場から理解することは簡単ではないのでどうにもならないだろう。いつか再開することに明るい見通しを持っているが、ただちに着手できないという状態である。ともあれ博論作成の過程で学問的知見以外に得たことは、これまで生きているうちに知らず知らずのうちに自分に組み込まれていたこうした思考の「構え」を再発見し、それをある程度客観視して次に進む力を蓄えられたことだっただろう。

最後にもう一度、ご指導いただいた講座の先生方、社会学講座の新旧のメンバーの皆さん、さまざまな研究会の場でいろいろお教えいただいたこの地方の研究者や実践家の方々、私の周囲にいる多くの人々に感謝の言葉を述べさせていただきたい。そしてモチベーションをしばしば失いかけたときに、いつでも受け入れてくれて歩みを進めるための力をくれた鈴鹿の山と谷にも感謝をしたいと思います。博論を頭のどこかに抱えたまま、近鉄の湯の山温泉駅、三岐鉄道の西藤原駅、伊勢治田駅、阿下喜駅、そして東海道線の柏原駅、醒ヶ井駅、彦根駅、近江八幡駅には、山行のため何度足を向けたろうか。

文献

Bourdieu, Pierre, 1999, “Préface”, Sayad, Abdelmalek, *La double absence : Des illusions de l'émigré aux souffrances de l'immigré*, Seuil, 9-13.